

# 自分の考えや 気持ちを 伝え合う力を 育てる授業を



文部科学省 初等中等教育局  
情報教育・外国語教育課 外国語教育推進室

**山田 誠志** 教科調査官

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官、国立教育政策研究所 教育課程調査官併任

新学習指導要領のもとでは授業をどう改善し、どのような評価が求められるのか。

文部科学省の教科調査官となって3年目を迎えた山田誠志先生が、

全国各地で教員研修や校内研修などを訪れ、実際に見てきた小中学校の

授業の様子を語り、授業改善に臨む先生方や教育委員会の指導主事へ向けてエールを送る。

## 学習指導要領の周知徹底のために

中学校で出会った英語の先生に憧れ、岐阜県の市区町村立中学校からスタートした、山田誠志教科調査官の教員人生。その後、大垣市教育委員会、西濃教育事務所、岐阜県教育委員会の指導主事を長年務め、文部科学省初等中等教育局の教科調査官に着任し、今年度で3年目を迎えた。中学校を主たる担当として全国各地を訪問しているが、小中接続の必要性も高まっているなか、小学校の教員に向けて講演をしたり、授業を参観したりする機会も多い。

今年度の予定を含め、訪れるのは43都道府県にももの

り、北海道から沖縄まで各地を飛び回る日々だ。各地の教育委員会や教育研究会などに招かれて、教員研修で講演をするほか、研究開発学校や国立大学の附属小中学校の校内研究会などでの指導助言などを行っている。

「教科調査官の仕事は、ひと言で言えば、『学習指導要領の周知徹底』です。2020年度から学校種ごとに新学習指導要領が実施されていきますが、その趣旨を現場の先生方にご理解いただき、具現化していくためには、やはり直接会ってお話する機会を持つことが重要です。そのためにも、各都道府県・市区町村の指導主事との関係性を築いていくことが何より大切であると考えています」

## 教科調査官として見てきたこと

### 指導主事との連携が授業改善のカギ

新学習指導要領が目指す「外国語」教育の目標へと導き、児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」を実現し、自律的な学習者を育成するために、学校では英語科教員たちが一丸となり、授業改善を進めている。だが、どの学校でも、どの地域においても、思うように改善が進まない場合もある。どのような指導をすればよいのか、児童生徒の言語活動を促す授業をどのようにつくればよいのか。生徒の思考力、判断力、表現力をいかに育むか。熱意を持って取り組むほどに、課題が立ちはだかる。学校や地域は違っても、その悩みは共通だ。山田教科調査官は各所で、教員たちの抱える授業改善への悩みや不安、疑問などに触れるたび、自らの信念と経験に裏打ちされた言葉で応えてきた。

だが、一度訪問しただけで、劇的に授業が変わるということはない。「だからこそ、継続的に指導や研修などを行っておられる指導主事の存在はカギであり、学習指導要領が目指す授業について指導主事と共通の理解を持って密に連携していくことが、学習指導要領の周知徹底に不可欠」と、山田教科調査官は考えている。

### 今あるものを変えれば、授業が変わる

今あるものを変えることは難しい。慣れ親しんだ指導を変えることには勇気がある。教員研修などの場では、山田教科調査官は多くの場合、ワークショップ形式を取り入れ、授業の場面を再現している。

例えば、「知識及び技能は、実際のコミュニケーションにおいて思考、判断、表現することを繰り返すことを通じて獲得する」と新学習指導要領には書かれている。「その内容を読んで頭では意味を理解していると思っていても、実際の指導の場面に落とし込むことは難しいものです」と山田教科調査官。研修参加者が身をもって体験しながら、どのような指導が求められているのかを実感してもらうこ

とで、新学習指導要領を頭だけでなく肌で理解してもらおう。

時には、各地域の指導主事から喜びのメールが届くことがある。「山田先生にご訪問いただいてから数カ月後に訪れたら、授業がずいぶん改善されていました」といった報告を受けると、これ以上ないほどありがたい気持ちになるという。そして、「授業を変えたら、児童生徒が変わった。それは指導している先生にとって何よりハッピーなことです。先生が変われば、訪問指導を続けてきた指導主事もハッピーになる。指導主事がハッピーになれば、私もハッピーになります」と笑顔を見せる。

### 動画を通して目指す児童生徒像を共有する

新学習指導要領のもとで、これから授業はどのように変わらなければならないのか。文面や自身の言葉だけでは伝えきれないこともある。そんなときに分かりやすく伝えられるツール、それが「動画」だ。授業の実践を見ることで、授業者のねらいや指導での言葉かけ、児童生徒が実際にやり取りをしている姿などは、ダイレクトに伝わる。だからこそ、山田教科調査官は動画を効果的に活用しているという。

「文部科学省のYouTube mexchannel『外国語教育はこう変わる!』では、小・中・高等学校の実践を、ポイント解説を添えた動画で紹介しています。また、研修などでは、私自身が各地で撮影してきた授業の動画を示すこともあります。そして、『どうしたら目の前の児童生徒が、動画に出てくるような姿に近付けるのか』と先生方に問い掛けながら、授業改善の方向性を考えていただきます。身近なトピックを楽しそうに即興でやり取りする子供の姿を目にしたら、動画を見た先生方も『自分の学校の子供たちにも、こうあってほしい!』と思うはずですから」

教科調査官に着任してから2年間、こうして動画を見せることで、誰に言われるでもなく、教員一人一人が自身の授業を変えたいと自発的に動き出すきっかけとなる種を各地でまいてきたのだ。

# 新学習指導要領への 移行期間を経た成果は？

## 小学校の先生は「必然性づくり」の名人

今年度から小学校では中学年の「外国語活動」、高学年の「外国語」がスタートした。これまで高学年で行ってきた「外国語活動」の取り組みや、この2年間の移行期間での取り組みを通して、小学校にはどのような成果があったのか。また、どのように今後の小学校での「外国語」教育に生かしていけばよいのか。

これまでの小学校での成果について、山田教科調査官は「小学校の先生方は本当に努力され、授業では実際のコミュニケーションの目的や場面、状況等に応じた児童のやり取りを見ることが出来ます。授業を拝見して感じるのは、小学校の先生は“必然性づくり”の名人であるということです」と述べる。

小学校では例えば、“What do you want to be?”という表現を「どんなときに使うのか?」という場面設定から始まる。そして、先生方は「こんなときには言わない」「そもそも子供はそんなことを言いたいのか?」と真正面から捉え、必然性のあるやり取りの姿を考えていくからこそ、意味のあるやり取りが行われているのだという。

「これは恐らく、他教科でも同じように授業を組み立てているので、その思考の習慣が外国語の授業でも生かされているのだと思います」と山田教科調査官は考える。「これまでは先生方ご自身の英語力に対する自信のなさが、英語を使って授業を進めることへの阻害要因となっていたこともあると思います。しかし、小学校の先生方は実践を積み重ねてきたなかで、少しずつ英語を使って授業を進めることに慣れ、必然性づくりの名人の素養が生かされた授業が見られるようになってきました」と喜び、今後さらにより良い授業が増えていくことに期待を寄せる。

## あくまで「子供準拠」で授業をつくる

高学年では教科化により、今後は検定教科書に基づいて授業を行うことになる。山田教科調査官の懸念は、「小

学校の先生方の強みであった、目の前の子供たちの実態に合わせた授業の組み立てが、教科書があることで教科書を教えることに縛られすぎはしまいか」ということだ。そして、教材準拠ではなく、あくまでも子供準拠で、必然性のある言語活動をこれまで通りに実践して欲しいと願っている。「これからも必然性づくりの名人であり続け、教科書は使いながらも、目の前の子供たちを見て授業をつくることを大事にしていきたいと思います」と話した。

そして、もう一つの懸念は「文字に関する技能」の指導だ。高学年には「読むこと」「書くこと」が導入され、新学習指導要領では「読むこと」「書くこと」それぞれの目標が示された。だが、小学校ではこれまで同様に「聞くこと」「話すこと」が中心であることに変わりはない。

「小学校での『書くこと』は『聞くこと』や『話すこと』に比べればそれほど難しいことが求められているわけではありません。十分に音声で慣れ親しんだうえで、児童が自分から「書いてみたい」と思うようになる気持ちを大切に育ててほしいと思います。そのためにも、子供たちとのやり取りを通じて、子供たちが伝えたいことを引き出すこと、そして、褒めることを忘れないでください。くれぐれも、音声で十分に慣れ親しんでいないうちに、単語や文を書かせるというような指導はやめていただきたいです。子供にとっては、たとえ書き写すといっても、大人が思う以上に難しい場面が少なくありません。先生が取り組みやすいことなどに安易に流れないでほしいと切に願います」と山田教科調査官は強調する。

## 「話すこと」は「既習表現の活用」と「内容の適切さ」を評価

このたびの教科化に対する小学校の先生方の不安材料の一つは、「評価」にある。2020年3月、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」が国立教育政策研究所から発表された。この「参考資料」は小・中学校の各教科等別に作成され、各教科等の特質に応じて、新学習指導要領の規定から評価規準を作成する際の手順

が示されたものだ。また、各教科等、複数の事例を掲載し、事例では「指導と評価の一体化」を具現化するための指導と評価の計画や具体的な評価方法等も示されている。観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選についても、事例のなかで具体的に示された。

山田教科調査官は、「話すこと」と、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の評価の違いを指摘する。例えば「聞くこと」であれば、聞き取ったことをワークシートに書かせるなどして聞き取れたかどうかを確認することも考えられる。「読むこと」「書くこと」についてもワークシートでの確認が可能であろう。一方で、「話すこと」はそのような方法で評価ができない。

児童の発話を見取る際には2つの視点を持つ必要がある。「既習表現を活用しているか」と「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じた内容になっているか(内容の適切さ)」は欠かせない視点だ。単元の終末に、その単元で繰り返し使用してきた表現を用いて児童が話す場面で、児童の発話に対して、「知識・技能」の観点を「既習表現を活用しているか」で、「思考・判断・表現」の観点を「内容は適切か」から評価する。ここでいう「既習表現」とは、当該単元で使用してきた表現のことを意味する。

例えば、『将来の夢』について発表させる場合、“I want to be a soccer player.”と児童が話したとき、まず、“I soccer player.”ではなく、“I want to be a soccer player.”と既習表現を使って表現できたことによって「知識・技能」を評価します。また、新しくやってきたALTに町紹介をしようという活動で、児童が“I like my town. We have ○○(デパートの名称).”と言ったとします。その際、『ALTは○○を知らないかもしれない』と考え直し、“○○ is (a) department store.”などと話すことができたことを評価します。コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、相手を意識しながら、話している内容が適切かどうかを『思考・判断・表現』の観点で評価するのです

## 伝え合う内容を重視し、言語活動を通して指導する

小学校では、コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、相手への配慮を持って、自分の考えや気持ちをやり取りする授業が行われている。そうして大切に育まれたコミュニケーションの基礎を、中学校や高等学校でも受け継ぎながら、質的な深まりのある授業が求められていく。

山田教科調査官は中学校や高等学校の教員に向けて「小学校の先生方のがんばりを大切に受け止め、『伝え合う内容』を重視して指導をしていただきたいと思います。言葉は自分の考えや気持ち、情報等を伝え合うためのものでもあるという点を踏まえ、『内容が先で、英語が後』ということをお願いしてほしいものです」と願っている。

新学習指導要領では「言語活動を通して指導をする」ということが求められている。「活動がないなかで学びはありません。同時に、“活動あって学びなし”の授業では、生徒の英語力は身に付きません。mextchannelの動画等も参考に、生徒が英語を使って自分の考えや気持ち、情報を伝え合う活動を十分に取り入れ、活動に取り組みせながら指導するという授業を行っていただきたいと思います」と力強く語った。



## 小学校「外国語」で求められる評価とは？